

「竜のはなし」

文・絵／熱田区・淳徳寺 いとう 修

いまから二年ほど前の夏、「本物の『わんこそば』が食べたい。何杯たべられるかやってみよう」と言い続けていた小学校四年生の孫（男子）を連れて、夏休みのおわりごろに盛岡へ出かけた。爺婆と孫三人だけ、初めての旅行である。

まず、名古屋空港から花巻空港へ。実はひそかに楽しみにしていたことがあった。花巻といえば、宮澤賢治（一八九六～一九三三）。「宮澤賢治記念館」へ行くことを条件に爺ちゃんが連れて行ってあげようという何とも身勝手なたくらみ。わずかな年金を少しずつ貯めて、息子に頼んで安い航空券を手に入れた、というわけである。

孫は楽しそうにはしゃいでいた。わんこそばのあの激しい食べ方、「婆ちゃんどバトルだ!」と意気込んでいる。夕飯が待ち遠しいようだった。空港の案内所で記念館へのアクセスをたずねて、まず私が楽しみにしていた記念館到着。すぐ目にしたのが、『竜のはなし』であった。賢治といえば『雨ニモマケズ』が有名なのだが、意外にもこの話が正面に取り上げられていた。「この話はおとぎ話ではあり



ません」という、賢治の言葉から始まる、とても短い童話である。

人や動物から恐れられる一匹の竜。ある時、「もう、動物や人を脅したり悪いことをしない」と心に誓う。皮が綺麗だからと猟師に皮を剥がれ、虫に身体をついばまれても静かにこらえ、やがて死んでいくが、ついにはお釈迦様になって人々を本当の救いへと導く、そんなお話。許すこと、受け入れること、自分の命さえ投げ出す痛ましいまでの竜の優しさ。賢治の仏教への絶対的信頼が読む者に「優しさ」の意味や本質を深く問いかけてくる。

宮澤賢治は法華信者であった。実家の父は熱心な真宗の聞法者で、当時は有名な真宗僧侶 あけがらす はや 例えば暁烏敏（一八七七―一九五四）をわざわざ東北まで招き、歎異抄講話会を催すような人であった。賢治もまたその講話を聴いていたに違いない。しかし、彼は真宗の聞法者にはならなかった。信は人を通じてしか伝わらない。賢治の痛ましいほどの優しさを持ってしても、真宗に向かわなかったのは何故か、それを確かめるのが私の課題でもある。当時の真宗近代教学を代表する暁烏敏の講話に触れて教化された人は多いと聞く。しかし、賢治はそうではなかった。このあたりに謎を解くカギがあるように思う。

孫はわんこそばをたらふく食べて満足そうだったが、翌日何処へ行きたいか尋ねるとイオンのゲームセンターだと言った。婆ちゃんに連れて行ってもらって、私はホテルで賢治の作品にひたった。